

Title	『ドイチュラント号の難破』を通して見た：ホプキンスの詩的本質
Author(s)	山村, 武雄
Citation	英文学評論 (1958), 5: 96-118
Issue Date	1958-03
URL	https://doi.org/10.14989/RevEL_5_96
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

『ドイチュラント号の難破』を通して見た

ホプキンズの詩的本質

山 村 武 雄

(1)

私は『人文』二号における「ホプキンズにおける感性の問題」と題する小論の中で、「ホプキンズの感性の問題はインスケイプとインストレスを突いて行くことによつて尽くすことができる」と言つた。今でもこれは間違いないと思う。しかし彼の詩の独自性、彼独特のスタイルを生み出したものはそれだけでは説明できない。まして彼のスタイルと類似したものを十七世紀英詩に見出し、ある共通の基盤を求めるとすれば、それでは間に合わない。というのは例えばダンにインスケイプ、インストレスという文学理念があつたわけではないから。それでこの稿においてはインスケイプ、インストレスという物の見方をも含め、それを包摂した「黙想」がいかに『ドイチュラント号の難破』の創作に寄与しているか、また後の作品に如何なる影響を及ぼしたかということを考えてみたいと思う。

(2)

ニューマンは「ホプキンズ氏がオックスフォードからやって来て、教会の一員として迎え入れられた」と一八六六

年十月二十一日の日記に書いているが、このカトリックへの改宗の日から二年近く経つた一八六八年九月七日にホプキンスはイエズス会の修練士 (novitiate) としてロンドンの西南郊ロウハムトン (Roehampton) のマンレサ・ハウスに着いた。その後九日にして聖イグナチウスの著した『心霊修業』(又は『靈操』) (*Exercitia spiritualia*) (一五三三年一五三三年大部分成る) に基く三十日間の長期静修 (Long Retreat) に入つたのであるが、W・H・ガードナ博士も「イエズス会の原理 (principles) と訓練及びこの会の教科書なる『心霊修業』はホプキンスの詩の形成に非常に深い関係をもっている」と言つてゐるように、このことはホプキンスの詩の展開に重大な一時期を画するものであつて、先ず「黙想」(meditation) というものが何を意味するかということを考えることは話の順序として欠くことができない。

『心霊修業』によると、三十日間の孤独、沈黙、思索、まねびの材料が四つの段階とどうか、週 (weeks) に分れてゐる。第一週は浄罪 (purgative) を目的とするもので、専ら罪、地獄について黙想をする。第二週は託身 (Incarnation) から受難前のイエズスのエルサレム入り (Palm Sunday) に至るイエズスの生涯についての黙想、第三週は聖週 (Passion Week) のイエズスの事蹟について、第四週は復活 (Resurrection) から昇天 (Ascension) に至るイエズスの事蹟についての黙想にあてられる。一回 (period) 一時間の黙想が一日五回行われ、その中一回は真夜中 (in the middle of night) に行われる。その他の時間は準備と結果の吟味にあてられる。

毎回の黙想は「準備」(preparatory steps) 「主部」(meditation proper) 「結末」(又は「対話」) (colloquies) の三つの部分より成り、「準備」は聖イグナチウスによると最初の心霊修業においては「二つの準備的祈りと二つのプレリュード、三つの要点と二つの神との対話」(a preparatory prayer and two preludes, three principal points and a colloquy) である。準備的祈りは心霊修業が適當に行われるよう恵みを求める簡単なものであるが、第一のプレリュードは宗教詩に重大な結果を及ぼしたと考えられる「現場の想設」(composition of place, seeing the spot) である。これは黙想者にとつて第二の天性の如きものになつたのであろうが、具象的なものを黙想する場合、想像によつて念

入りな、正確な細部 (elaborate, exact detail) にわたつてこれを見ようとし、抽象的なものを黙想する場合、心象を作る能力 (Image-forming faculty) をして具象的な、まよまよとした道具立て (concrete, vivid setting) をつくつてめる。例をかりに詩にとるならば、十七世紀英詩人ロバート・サウスウェル (Robert Southwell) の『新しき王、新しき盛儀』 (New Prince, new pomp) における、

Behold, a seely tender babe

In freezing winter night

In homely manger trembling lies,

見よ、あとけなく、か弱きみどり子

凍る 冬の夜、

粗末な馬ぶねに、震いつつ伏したもう。

という写実的な描写となり、抽象的なものの黙想はヴォーン (Vaughan) の『現世』 (The World) における、

I saw Eternity the other night

Like a great Ring of pure and endless light

われ 先夜 淨き無窮の光の

大いなる指環のごとき 永遠を見たり

の如きものであつたであらう。第二のブレリニエードは「求める恵み」 (petition) であり、神に黙想の中で達成したい

ことを願ひ求めるのである。これは題材に即して行われ、イエズスの受難ならば、苦悩のイエズスと共にする悲しみ (grief)、涙、苦痛を求め、イエズスの復活ならば、イエズスと共に喜ぶことを願う。「要点」とは黙想すべきことをよく咀嚼して、要点にまとめておくことである。それに一つの神との対話をもつて準備を終る。

さて黙想の中心たる「主部」は魂の三つのはたぎき (three powers of the soul) 即ち「記憶」(memory)「理解」(understanding)「意志」(will) によつて行われる。記憶はわづらひおつて、注目すべきは理解である。『ドイチュラント号の難破』第五節に「私が理解するとき、私はほめたたえる」(I bless when I understand)とあるが、或る玄義 (mystery) について考える場合、それに含まれる真理 (verities) を探求し、原因 (causes) 特性 (proprieties) 結果 (effects) 状態 (circumstances) を考量し、妥当にして完全な概念をつくつて、意志をして納得させ、行為に移らしめるのである。これは非常に知的 (intellectual) にして分析的 (analytical) な過程を経るのである。次に意志は黙想した内容に應じて種々の感動 (affections)、徳の高い行為 (virtuous acts) をひき出す。例えば、罪に対する悲しみ (sorrow)、お恵み (mercy) に対する信頼と賛美、神の意志に対する服従 (resignation) などである。この三つの心のはたらきは相助けるのであつて、三位一体になぞらえられる。記憶し、理解し、愛する (remember, understand, love) のでなければ、魂は三位一体にあずかることができない。

最後に黙想のクライマックスであり、結末であり、目的であるのは神との「対話」(colloquies) であつて、「時には神と、時には聖母と、……われわれ自身と、われわれの心と、罪人と、いやそればかりでなく無感覚な所造とも語る」ことをザールの聖フランソワ (St. Francois de Sales) (一五六七—一六二二)^⑧ はすすめるのである。

そこで黙想は大体において三段階、即ち「現場の想設」(composition)「分析」(analysis)「対話」(colloquy) に分れることになる。『新しき王、新しき盛儀』で「分析」にあたるところは、

Alas, a piteous sight!

The inns are full, no man will yield

This little pilgrim bed,

But forced he is with seely beasts

In crib to shroud his head.

Despise him not for lying there,

First, what he is enquire,

An orient pearl is often found

In depth of dirty mire.

ああ、いたまじき光景よ！

旅籠はふたがり、みどり子に

寝床を譲るものもなく、

やむなく無心のけだものと

馬ぶねに頭を横たえたもう。

かく宿るとてあなどらず、

まず御身分をたずぬへし。

光り輝く白玉は汚穢の泥土の

底深く見つけられることまれならず。

と二三行目までいへ。『按語』はまたるふいへば、

This pomp is prized there.

With joy approach, O Christian wight,

Do homage to thy king;

And highly prize his humble pomp

Which he from heaven doth bring.

かかる盛儀は彼の国にてあがめらる。

歎び来れ、ああ キリスト者。

おん身が王にぬかずきて、

そが天国よりもたらせる

ついでに盛儀をたたえまほしれ。

じゆん。 五十種神がまの Manresa, the Spiritual Exercises of St. Ignatius (Frederick Pustet & Co.) を読み、ルイ・
マーン (Louis L. Martz) の『繁櫻の詠』(The Poetry of Meditation) (1954) ヴィクトロ・マンソン著『キリストの道』

を参考として、「黙想」の骨子を説明した。

(3)

ホプキンスは一九六八年八月七日のブリッヂズ宛の書簡で、「私は私の『Summa』(Summa)をお送りすることができます。というのはそれは私の他の詩といつしよに焼き捨てしましたから。それらは私の心境 (state) と召命 (vocation) のさまざまになると思つたからです」と書いているが、それほど固く献身を決意し、しかも七年という長い間、「折々、求められるままに書いた二三のちよつとした寄進の詩 (little presentation pieces) のほか、何も書かなかつた」^⑤にも拘らず、『ドイチュラント号』の筆をとつたということは、よくよくこの題材が彼の使命に合致すると感じたからに相違ない。彼はまた「一八七五年の冬、ドイチュラント号がテムズ河口で難破し、それに乗船していた、ファルク法令」^⑥ (ビズマーマーク宰相のカトリック政策により時の文相ファルクの名 (Falk) を冠する法令) によるドイツからの追放人、五人のフランシスコ会修道女たちが溺死したとき、私はその記事に打たれた (I was affected) と書いているが、この affected という語は「黙想」の用語であることに注意せねばならない。先に説明した「黙想」の「主部」における「意志」のはたらきは「理解が黙想したことに従つて、さまざまの感動 (affections) または徳の高い行為をひき出すことである。『黙想』 (Meditations) (St. Omer, 1619) の著者ルイ・ド・ラ・プエンテ (Luis de la Puente) は、「われわれが心の中で神に話しかける際、われわれが神から受ける感動 (divine affections) は四つの種類がある」^⑦と云う。最初のものは「内的聖歌」 (Interior Psalmes) で、これを彼は「神のおきこめ (commandements) とおしえ (counselles) を完全に守るよう、身を捧げて、神に仕えまじらんとする熱烈な願望 (effectual desires) と決意をともなう、神に対する愛という心の動き (actions)」と定義する。第二のものは賛歌 (hymns) で、つまり「神がもちたもうあらゆる美点と完全性、及び神がなしたもうあらゆる御業を教えあげて神を賛える心の動き (affections) であり、第三のものは「靈的雅歌」 (Spiritual

Canticles)」、即ち「神が現にありますが如くあることを喜ぶ霊的歡喜と勇躍 (alacrity) の心の動き (affections)」¹⁾。第四のものが感謝 (thanksgiving) である。黙想によつて呼び醒まされた心のはたらきはこれら「感動」の中に注がれるのである。神学には情緒がみなぎり、具体的な個々の事実は崇高な思想に満たされ、遂に黙想する魂は、「五感と魂の内的なはたらきとをすべて一体にしてしまふ、それらの正しい使い方」(The right use of the senses and interior powers of the soule, reducing them all to union) を發揮して、豊かな微妙な統一体 (a rich and delicate whole) となる。これは宗教的行為としての黙想の中における感動 (affection) の意義である。それをすぐにドイチュラント号の難破記事を読んでの感動と結び付けることには勿論無理がある。しかし、これから論証しようとするように、この難破という事件を通して、ホプキンズは一つの「黙想」を行つていてと考えられるのであつて、「私はその記事に打たれた」という言葉の中に以上述べたような感動の意味をふまえていてと期待しても無理ではないであろう。兎に角七年間沈黙したのち、堰を切つたように流れ出したこの大作に、『心靈修業』に基く彼の宗教的經驗があらゆる面にもじみ出していることは考えられることである。

まず構成に現れた影響について見よう。『ドイチュラント号』は二部に分れている。前置き (proem) は十節 (stanzas) より成り、ホプキンズ自身の信仰体験、即ち神に対する恐怖、精神的暴風雨による「難破」と聖籠による「救済」(redemption) を扱い、「現場の想設」(第一節)、「分析」(第二節―第八節)、「対話」(第九節―第十節) という黙想の形式をふんでいると考えてよいであろう。第二部は二十五節より成り、ドイチュラント号の難破と英雄的修道女の「犠牲死」を通じての「救済」を扱うが、この方は明かに「現場の想設」(第十一節―第十七節)、「分析」(第十八節―第三十一節)、「対話」(第三十二節―第三十五節) と黙想の三段階をとつてゐる。原文についてこれを見る

Thou mastering me

God! giver of breath and bread;

World's strand, sway of the sea;

Lord of living and dead;

Thou hast bound bones and veins in me, fastened me flesh,

And after it almost unmade, what with dread,

Thy doing: and dost thou touch me afresh?

Over again I feel thy finger and find thee.

(大意) 御身、私を征服したもう神よー 気^き息^そと^そんを^を与^よさ^さる^るもの、この世の寄せる岸边、海を統へるもの、生者、亡者の主、御身は私のうちを骨と血管を結びたまひ、私を肉にくへくり、その後、恐れなどで御身がつくりしものを殆んど砕きたもうた。今また新たに、私に触れたもうか。私は再び御身の指を感じ、御身を見出します。

I did say yes

O at lightning and lashed rod;

Thou heardest me truer than tongue confess

Thy terror, O Christ, O God;

Thou knowest the walls, altar and hour and night:

The swoon of a heart that the sweep and the hurl of thee trod

Hard down with a horror of height:

And the midriff astrain with leaning of, laced with fire of stress.

(大意) ああ、私は稲妻と打ちすえられたむちの下で、「はぐ」と申しました。ああ、キリストよ、神よ、御身は私が口で言うより真実な御身の恐ろしさを告白するのを聞きたまいました。御身はあの壁、祭壇、時間、夜、御身が隔々まで眼を屈かせ、投げてつけたまへ、恐ろしいまへの高みのためたひどく踏みつけられた私の心が起した気絶、御身にうたれた苦しみのよじれて張りつめ、御身の火をむち打たれた横隔膜を知りましたまへです。

3

The frown of his face

Before me, the hurtle of hell

Behind, where, where was a, where was a place?

I whirled out wings that spell

And fled with a fling of the heart to the heart of the Host.

My heart, but you were dowewinged, I can tell,

Carrier-witted, I am bold to boast,

To flash from the flame to the flame then, tower from the grace to the grace.

(大意) 眼前には彼のしかめつ面、背後には地獄のすさまじい響き、どろどろに、どろどろに行けたであろう。そのとき私は翼をいと延ばし、心を一擲して、キリストの心に逃げこんだ。わが心よ、だがそのとき焰から焰へと飛び、聖寵から聖寵へと舞い上つたとは、確かに御身は鳩の翼をもち、伝書鳩の知恵をもつていたと敢えて言いたい。

まず注目すべきは時制である。第一節では現在完了形と現在形が用いてある。過去における「骨と血管を結び」、「肉にくくり」、また「砕いた」という一連の事実を回顧し、今また「新に触れたまい」「御身を見出す」と過去から現在に至る概観になつてゐる。最も簡潔に彼の信仰生活の辿つた跡をまとめたものと言ふことができる。というのは、聖霊 (Holy Ghost) は「聖父の右手の指」(*digitus paterna dexterae*)と言われるが、またホプキンスは彼自らほどした『心霊修業』の註解において、聖霊とは「それを受けるものを、存在の一つの絶壁から他の絶壁へ、更にキリストの中に生きる、靈的生命のある行為にまで高めしめる。これこそはまことに神の指、他の届き得ない、個性の機微にふれる神の指である」(grace "lifts the receiver from one cleave of being to another and to a vital act in Christ: this is truly God's finger touching the very vein of personality, which nothing else can reach.")と書つており、第一節の「御身の指」は聖霊という神の指であり、それは彼を砕く指であつたと同時に、また彼をしてキリストに与り、もう一人のキリストたらしめるものであつたことが分るし、ワイルド (Wilde) の『ユニヴァーサル英語辞典』によれば、「キリストを見出す」とは、「靈的体験によつて、キリスト教の真理を会得すること」(to become convinced by spiritual experience of the truth of Christianity)であり、信仰の眞の歡びを味うに至つた心境を示しているからである。短いながら、第一節を「現場の想設」というか、分析に移る前の予備的整理といふことができよう。第二節、第三節では過去形が用いてある。第一節に書かれた「御身が作りしものを砕きたもうた」という過去の事実の分析に入つたものと考えられる。この過去の事実の時期を定めることは困難であるが、ホプキンスが「その詩(即ち『ドイチュラント号の難破』)において私について言つてゐることは全く厳密に、文字通りに眞実であり、すべて起つたことである」と言つてゐるし、「あの壁、祭壇、時間、夜」とあることから判断して、マンレサ・ハウスにおける一八六八年九月の「長期静修」(主として第一週)のことを言つてゐるのではあるまいか。「はい」と言つたとは、『心霊修業』

の教えを肯定し、神に身を捧げて、主を賛え、敬い、仕える (to praise, to reverence, and to serve the Lord) ことを決意したことを言うのであろう。「焰から焰へ」の解釈については第三十四節の「すべて火の御眼差し」(his all-fire glances) を考慮に入れるべきであらう。ピーターズ (Peters) はこの句を「疑悩 (desolation) から魂が神と共にある状態 (the soul's presence with God) へ」と解している。^⑤「聖籠から聖籠へ」は前述の『心霊修業』の註解におけるホプキンスの言葉から、「彼を砕きたもう神の指」なる聖籠から「キリストと一体になる欲び」という聖籠へという意味であることは明かである。第四節では肉のはかなさ、脆さと、聖籠にあずかる霊の安定を砂時計と泉にたとえた水という分析的イメージを用いて説明しているが、これについては後に述べる。

5

I kiss my hand

To the stars, lovely-asunder

Starlight, wafing him out of it; and

Glow, glory in thunder;

Kiss my hand to the dappled-with-damson west:

Since, tho' he is under the world's splendour and wonder,

His mystery must be inressed, stressed;

For I greet him the days I meet him, and bless when I understood.

(大意) 私は星明りからキリストを呼び招いて、美しくちらばつた星にキッスを送る。雷かみなりの白熱と燦然にも同じことをする。幸すもも(すもも)色にまだらになつた西空にキッスを送る。キリストはこの世の壮麗と驚異のうしろにかくれていたもう

が、その女義は私の心をうち、感じとられねばならないから。というのは私が主に会う日、私はあいさつし、私が理解するとき、ほめたたえるのであるから。

ホプキンスは個性的な気質と天賦の絵心から、自然物のインスケイプに強い関心をもっていたことは彼の日記その他にうかがわれる(拙稿「ホプキンスにおける感性の問題」参照)。例えば『オックスフォードに寄せて』というソネットで、オックスフォードの或るチャペルの外側に立つて眺めると、急角度の屋根はてすりの後に隠れるが、むねは壁の上にまだ見えている位置にくるまでは、れんが層などの水平線が錯覚によつてわん曲して見えることを叙した後、

None besides me this bye-ways beauty try.

Or if they try it, I am happier then :

The shapen flags and drilled holes of sky,

Just seen, may be to many unknown men

The one peculiar of their pleased eye,

And I have only set the same to pen.

(大意) 私のほかに誰もこの裏通りの美を味つてみるものはない。もしそんな人があれば、それだけ嬉しいわけだが。たつた今見た、ある形にきられた板石、穿たれた空の穴、は多くの無名の人にとつて、自分の眼の一つの特性と片づけられるかもしれないが、私はそれをただ書きつけただけである。

と書いている。これと、『ドイチュラント号』第五節を比較してみると、『心霊修業』の中の「神の存在を絶えず嬉しく思い出して、神の中に生きなければならぬ」(I ought to live in God by a constant and happy remembrance of His

presence) という項に、「あらゆる所造及び私の中にいます神」(A God who is present in every creature and in myself)、「あらゆる所造の中で私のために働き、しかも神の無限の安静を少しも失いたもうことなき神」(A God who acts in every creature and for my service, but without losing any thing of His infinite repose.)、「あらゆる神の完全を私に伝えんことを願ひ、前もつて所造の中にかすかにその完全性の姿を示したもう神」(A God who wishes to communicate all His perfections to me, and who beforehand shows me the image of them in a faint degree in His creatures.)^⑧を思い出すべきことが書いてあるが、この教えの影響が『ドイチュェラント号』に現れ、インスケイプの内容を深化したと考えてよいであろう。この深化した内容をもつインスケイプの恐らく最初の表れが、マンレサ・ハウスに入つて一年八カ月後の一八七〇年五月十二日の日記の「私は私が見ていたツリガネズイセンより美しいものがかつて見たことがあるとは思わない。私はそれによつてわが主の美を知る」という記事であることを考へても黙想の影響が推察できるであろう。第六・七・八節では聖寵の「神の指」はキリストの至福からくるものではなく、主の託身と受難より来り、これは切羽つまつた魂がどたん場にきて悟るものであることを説く。これで分析の部分を終り、第九・十節は「対話」である。

9

Be adored among men,

God, three-numbered form ;

Wring thy rebel, dogged in den,

Man's malice, with wrecking and storm.

Beyond saying sweet, past telling of tongue,

Thou art lightning and love, I found it, a winter and warm;

Father and fondler of heart thou hast wrung :

Hast thy dark descending, and most art merciful then.

(大意) 三位一体の神よ、人々によつて崇められたまえ。狭い穴の中で意地をはる御身の反逆者、人間の悪意を難破と暴風雨もて折伏しやくふくしたまえ。言葉に尽くせぬほどやさしく、御身は稻妻であると共に愛であり、嚴冬であると共に暖かいことが私には分つた。御身は苦患くくわんを与えたもうたその心の父であり愛撫者である。暗澹と襲いかかりたもう、その時最も慈悲深くあらせたまう。

第十節も「かなとこと火で人間の心の中に御身の意志を鍛えて作り上げたまえ」と神に呼びかける。これで前置きの構成が三段階になつていると見なして差支えないことを見てきた。

第二部は第十一節から第十七節まで、当時のロンドン・タイムズ紙の報道と照合して明かなように、極めて忠実に事実を追うている。これは「現場の想設」にあたる。第十八節で一転して、難破の記事を読んだときの詩人の心を自ら吟味する。

18

Ah, touched in your bower of bone

Are you! turned for an exquisite smart,

Have you! make words break from me here all alone,

Do you! — mother of being in me, heart.

O unteachably after evil, but uttering truth,

『ドイチュランント号の難破』を通して見たホプキンスの詩的本質

Why, tears! is it? tears; such a melting, a madrigal start!

Never-eldering revel and river of youth,

What can it be, this glee? The good you have there of your own?

(大意) ああ、御身は御身の骨のへやで強くうたれた。激しい痛みのため御身はのたうった。御身はここでたつた独りの私から言葉を送り出させる——私のうちの生命の母なる心よ。ああ、性懲りもなく悪を追うが、真理を吐いて、なに、涙! だね? 涙だ。何たる涙もろい、小恋歌的衝動だ! 老ゆることなき青春の歓楽と流れよ、この飲びは何ということだらう? そこに御身自身の利益でもあるのか?

罪なくして故国を追われた修道女の苦難を思うと詩人の胸は痛んだ。しかし涙、この飲びはどうしたことか? ここでわれわれは前述の「神から受ける感動」(affections)を想起する必要がある。しかし詩人はこの疑いにすぐ決論を与えず、「分析」をすすめて行く。第十九節では船内に逆巻く怒濤と暴風雨の中で主を呼び求める修道女には唯一つのものしか見えていないと説明、第二十一節ではカトリック教徒のもつ愛情の故に、故国を追われた経緯を考え、殉教であることを確かめる。殉教者の親玉が天国より地上の人の価値をはかつておられる。主の御眼には雪片は天国の庭に散りしく白百合の花弁である。第二十二節は五人の修道女と五つの聖痕を五の数で結びつけ、形而上詩的奇想に類するものとなる。ここで彼らの死は「犠牲」、しかも神によつて予定されたキリストと同じ「犠牲」なることを明かにする。しかし「分析」の中心は第二十五節—第三十一節である。第二十五節では修道女が、「おお、主よ、主よ、早く来たりたまえ」と叫んだのは「どういう意味であったか? キリストの生涯をそのまま生きたいためであったか? 戦いを強く身に感ずればこそ、慰藉もまた強く求めて、宝冠を望んだのであろうか?」と主に尋ねる。第二十六節で「貴女の希望の天国とは如何なるものか?」と反問する。第二十七節では第二十五節の疑問に対する答とし

て、「悲しみが沁透つている心が楽になることを欲するのは、危険や電撃的な恐怖のためではなくして、人生が課する仕事という荷車^{こんか}がもたらす疲労^{こんか}困憊^{こんか}ときしり音のためである」とする。しかしあくまで真実に迫らんとする詩人はその答に満足できない。独居して祈るとき、キリストの受難が心に与える感銘は手ぬるい。風は荒れ狂い、浪は巨竜のように寄せて砕けるところ、修道女の心の荷ははるかに重いことを悟る。第二十八節で詩人は想像力の限界まで来て、想像力を求めてあえぐ。突如、彼女の見たキリストの姿が見えた。主が課した運命を主が結末をつけ、救いたもうのであった。第二十九節で、詩人は、修道女の心が正しく、眼は純一で、混沌たる衝撃の夜を誰が、何のためにひき起したかを読みとつた、ただキリストのみが読み得るように読みとつたと称える。第三十節は「心の光なるイエズス、処女の子なるイエズス」(Jesu, heart's light, Jesu, maid's son)と暗示的な呼びかけが始まる。何故なら、この修道女にとつてイエズスは「心の光」であり、また彼女の心にキリストが宿り、「生れた」からである。そのことをホプキンズは一種の奇想を用いて説明する。その夜この修道女の光榮を祝つて天国に開かれた宴は「汚垢なき一人の婦女^{おんな}の祝宴。何故ならば汚垢なくして孕られ、汚垢なくしてイエズスを孕くことは成し遂げられたり。されどここには心の陣痛、頭腦の分娩、御身に聴き、守り、率然と御身を出したる言葉ありき。」(Feast of the one woman without stain. For so conceived, so to conceive thee is done; But here was heart-throe, birth of a brain, Word, that heard and kept thee and uttered thee outright.)この後半はルカ伝十一章二七節—二八節「或女、声をあげて言ふ『幸福なるかな、汝を宿しし胎、なんちの嘔ひし乱房は』イエス言ひたまふ『更に幸福なるかな、神の言を聴きて之を守る人は』に立脚していることは言うまでもない。かくして英雄的修道女は「救済」されたが、他の遭難者たちはどうであろう? 第三十一節で摂理が彼らを驚かせ、呼びもとすことを望む。そうすれば「難破」は天国の「収穫」(harvest)となると「分析」を結ぶ。「対話」の部に入つて、第三十二節は「われ御身を嘆賞す」(I admire thee)という呼びかけに始まるが、賛美する性質が第一節の「海を統べるもの」「この世の寄せる岸辺」と同じ水に

関するものであることは「難破」を主題とするこの詩にふさわしい。ただ「動く心を止め、消す大洋」(Stanching, quenching ocean of a motionable mind)(stanchは「流れを止める」と「欲望を鎮める」意を兼ねる)という言葉は「魂という河川が流れ入る神という大洋」を連想させて、遭難した修道女の魂の行方をしのびせる。これを第三十三節の「水のあらゆる状態を乗り切る慈悲、聴くものとしての箱舟」(a mercy that outrides the all of water, an ark For the listener)で受け、最後に「究局の目標は受難によって突き落され、よみがえりたもうたわれらが巨人、大腿に歩みたもう暴風雨の中にとらえられた、いつくしみ深き父の遣わされしキリストなり」(The uttermost mark Our passion-plunged giant risen, The Christ of the Father compassionate, fetched in the storm of his strides)という句で、修道女もまた詩人と同じくキリストの道、「受難」を通しての「救済」という道を歩んだというこの詩の主題を打ち出し、結語とする。第三十四節ではキリストが優しくこの世に働きかけたまわんことを願い、第三十五節では修道女にキリストへのとりなしを求め、主が英国に來つて人心に光を与えたまわんことを希望する。

構成上、黙想の段階を追うことはホプキンス自身何も言及していないし、これは自然にそうなつたのであろうが、この点に関して『ドイチュェラント号』と共に考えなければならぬのはソネットである。ソネットは彼の『詩集』(三版)に載っている七十七篇(終りのはカサット)The Beginning of the)のうち、ソネットと考えられるものが半分以上の四十二篇ある。集約的表現を好むホプキンスにとつてこれは当然と言えるかもしれないし、その四十二篇のうち十篇はマンレサ・ハウスに入る以前の作であるから、これは決定的には言えないが、在来のソネットの性格としての一つの思想、感情の起承転結による運びが黙想の形式に似通うところがある点も何程かの関連があるのではあるまいか。少くとも黙想の段階を追つたソネットが一つある。それは『春』である。

NOTHING is so beautiful as spring —

When weeds, in wheels, shoot long and lovely and lush;

Thrush's eggs look little low heavens, and thrush

Through the echoing timber does so rinse and wring

The ear, it strikes like lightning to hear him sing;

The glassy peartree leaves and blooms, they brush

The descending blue; that blue is all in a rush

With richness; the racing lambs too have fair their fling.

What is all this juice and all this joy?

A strain of the earth's sweet being in the beginning

In Eden garden. — Have, get, before it cloy,

Before it cloud, Christ, lord, and sour with sinning,

Innocent mind and Mayday in girl and boy,

Most, O maid's child, thy choice and worthy the winning.

(大意) 春の如く美わしきものなし——雑草は車輪の形をなして、長く美わしく、青々と萌えいで、つぐみの卵は小さい、低い、空のよう、つぐみは林の中を鳴きとよもし、耳を洗い、ねじり、その鳴くを聞けば、稲妻にうたれたる心地す。ガラスのような梨の葉と花は、垂れ下がる青空を払い、その青空は豊けさをのせて太多忙、走る小羊も負けじと楽しむ。——すべてこの液汁と歡喜は何ぞ。いと初め、エデンの園にはほえみし、大地の調べ。——とり給え、手に入れ給え、キリストよ、主よ、おとめ処女の子なる御身の好みたまい、手に入れたもう値打ある、少年少女の無染の心、五月祭を。大地が罪も

て飽かせ、曇らせ、ねじけさせぬ間だ。

オクテープにおいては起承の分れなく、ただ一連の春景色の細叙になつてゐる。これを「現場の想設」と見れば、セステットに入り、春のみずみずしさ、よるこびは原罪以前の大地のしらべを表わすと観する「分析」を経て、詩人自身ダッシュで区分して、その後書かれた『ラッパ手の最初の聖餐』における願望に似た「対話」に終つてゐる。この黙想とソネットの関係について、ついでながらダンに触れると、ホーリ・ソネット (*Holy Sonnets*) を全体的に眺めるならば黙想の影響が歴然としてゐる。「御使たちよ、丸き地球のあらゆる想像上の地の隅で御身のラッパを吹け」(七章「黙想」) (*At the round earths imagin'd corners, blow Your trumpets, Angels*) という具象的表現は現場の想設を思わせ、分析的な思考の運び、神、自分の魂、死などとの対話もある。しかし特に注意すべきは第十五のソネットである。先に「神の存在を絶えず嬉しく思い出して、神の中に生きなければならぬ」という項に、「あらゆる所造及び私の中にいます神」を思い出すべしとの『心霊修業』の言葉を引いたが、これと同じことが、「御身は、神が御身を愛したもう如く、神を愛することを欲するか。もし欲するならば、我が魂よ、天国にて御使たちにかしずかれる靈なる神が御身の胸にその宮居を造りたもうとの、この益ある黙想を阻囁せよ」(*Wilt thou love God, as he thee? then digest, My Soule, this wholesome meditation, How God the Spirit, by Angels waited on In heaven, doth make his Temple in thy breast.*) と、このソネットにあるところからみて、またその「阻囁」の仕方が、「いと聖なる御子を生み、今も尚生みたもう(というのは聖父は決して去りたまわぬから) 聖父は、聖父の栄光と永遠の安息の共同相続人として、養子に御身を選びたもうた。そして物を盗まれ、その盗品が売却されているのを見付ける人は、その品をみすみす失うか、買い戻すかしなければならぬ」と同じく、栄光の御子も自ら造り、サタンが盗んだわれわれを解縛するため、地上におりて殺されたもうた。人が以前神に似せて造られたのも有難いが、神が人の如く

造られたものは更に有難し」(The Father having begot a Sonne most blest, And still begetting, (for he ne'r begonne) Hath deign'd to chuse thee by adoption, Coheire to his glory, and Sabbathes endlesse rest. And as a robb'd man, which by search doth finde His stolne stuffe sold, must lose or buy't againe : The Sonne of glory came downe, and was slaine, Us whom he had made, and Satan stolne, to unbinde. 'Twas much, that man was made like God before, But, that God should be made like man, much more.)とあるが、具体的に分析的、論理的な点を見てもこの「黙想」は『心靈修業』に基く黙想であることは明かであろう。ただホーリ・ソネットの一つ一つのソネットの中で黙想の段階を追うていゝとは思われない。

構成に及ぼした影響について詳しく述べたが、むしろ重点を置きたいのはスタイルについてである。一八六四年四月から一八六六年夏にかけて、ホプキンスは形而上詩人の一人ジョージ・ハーバートに親しみ、彼に習つて様々の短詩形を工夫した(例えばホプキンスの『新解釈』(New Readings)は各行の綴の数においてハーバートの『服従』(Obedience)に似ており、押韻においてハーバートの『履行』(The Discharge)に似ている)。しかしスタイルにおいて未だ独自の境地に達していないが、『ハイチュランナ号』しかも何れもその「分析」の段階において、

I am soft sift

In an hourglass — at the wall

Fast, but mined with a motion, a drift,

And it crowds and it combs to the fall ;

I steady as a water in a well, to a poise, to a pane,

But roped with, always, all the way down from the tall

Fells or flanks of the voel, a vein

Of the gospel proffer, a pressure, a principle, Christ's gift.

(大意) 私は砂時計の柔かい砂の流れです——壁のところは固定しているが、動きと流れに下から崩されて、群がり、梳り、落ちるに至る。私は泉の水のように、均衡がとれ、板ガラスのようになるまで、安定している。しかしいつも高い山の側面をつたつて、一脉の福音の供与、圧力、原理、キリストの贈物が糸のようにつながつて送り込まれている。

Five! the finding and sake

And cipher of suffering Christ.

Mark, the mark is of man's make

And the word of it Sacrificed.

But he scores it in scarlet himself on his own bespoken,

Before-time-taken, dearest prized and priced ——

Stigma, signal, cinquefoil token

For lettering of the lamb's fleece, ruddying of the rose-flake.

(大意) 五つ！愛難のキリストの手がかり、特性的付随物、符号。注目せよ、そのしるしは人のつくりしもの、それを表わす言葉は「犠牲にされたる」である。しかしキリストは自らそれを、時以前に召され、深く愛で、高く値踏され、主に予約されし者に、鮮紅に刻みたまう——小羊の毛に印し、バラの花卉を紅に染めるための、聖痕、信号、五弁飾りの象徴。

の如きイメージャリが現れたことは、「黙想」の理知的、分析的なはたらきの結晶ということができるとはあるまい

か。『ドイチュラント号』に至つてはじめて、知性、情緒、感覚が一つになり、宗教と芸術が融合されたが、その後には黙想のはたらきが動いていることの証左の一端をここに見るのではあるまいか。更に考えてみたいことは、『ドイチュラント号』の中に枚挙に遑ないほど呼びかけが多いが、これは彼の他の詩についても言えることで、彼の詩の特徴の一つであるが、これは黙想の「対話」と関連があるであろう。彼の精神的視野には常に話しかけるべき相手があり、たとえ抽象的なものでも彼にとつて実在であつた。少くともキリストという聴者をもつていたという意味で彼の詩はT. S. エリオットの「第二の声」〔The second voice (the voice of the poet addressing an audience, whether large or small)〕^⑧の範疇に入るであろうが、このことが彼をして「第三の声」を企図させるに至つたのではあるまいか。彼がブリッヂェズに宛てた書簡(一八七九年十月八日)で、「僕は今まで手がけた何よりも大きな仕事と取つ組んでいる。聖ウィニフレッド(St. Winifred)の殉教についての悲劇とマーガレット・クリザロウ(Margaret Clitheroe)の殉教についての悲劇だ^⑨」と書いているが、遂にいずれも完成しなかつたのは、結局、彼は対話的傾向をもつ抒情詩人であつて、劇作家ではなかつたからであらう。

バジル・ウィリー(Basil Willey)は『十七世紀の背景』(The Seventeenth Century Background)で、『ダンにとつて思想は経験であつた。それは彼の感性を変えた』と、エリオット氏はいみじくも指摘した。このことは大体プランにもあてはまる。そして両者共「事実」と「価値」がまだ機械的「哲学」によつて分離されないス・コ・ラ・的・統・統・にそれを負つていると私は信じる^⑩』と書いている。二十世紀英詩の謂わば先端に立つ『ドイチュラント号』を含むホプキンスの詩と十七世紀英詩に共通の基盤がもしありとすれば、「黙想」は重要な要素になるのではあるまいか。十七世紀英詩に及ぼした黙想の影響についてはエール大学教授マーツ氏の著書があり、その方面の検討は後の機会に譲つて、先ずホプギンズについて考えてみたわけである。

〔註〕

- (1) *Letters I*, p. 24; Lahey, *Gerard M. Hopkins*, pp. 156-8.
- (2) W. H. Gardner, *Gerard M. Hopkins, A Study of Poetic Idiosyncrasy in Relation to Poetic Tradition*, vol. II, p. 41.
- (3) Louis L. Martz, *The Poetry of Meditation* p. 37.
- (4) *Letters I*, p. 24.
- (5)(6) *Letters II*, p. 14.
- (7) Martz, *op. cit.* p. 70.
- (8) John Pick, *Gerard M. Hopkins, Priest and Poet*, p. 42; cf. Norman Weyand (ed.), *Immortal Diamond* p. 11.
- (9) W. A. M. Peters, *Gerard M. Hopkins, A Critical Essay towards the Understanding of his Poetry*, p. 154.
- (10) Manresa, *the Spiritual Exercises of St. Ignatius* [cf. *The Spiritual Exercises of St. Ignatius Loyola* (Catholic Book Publishing Co. New York) p. 116.]
- (11) John Pick, *A Hopkins Reader*, p. 43.
- (12) Norman Weyand (ed). *op. cit.*, p. 353-374.
- (13) T. S. Eliot, *The Three Voices of Poetry*, p. 4.
- (14) *Letters I*, p. 92.
- (15) Basil Willey, *The Seventeenth Century Background*, p. 45.